つれづれ時事寸評14

# 行方不明事件と退行の心理

本研究所研究員　大野　哲夫
（社会心理学）

2014年の９月11日神戸市長田区で小学校１年の女児が行方不明となり、自宅近くの雑木林で遺体が発見され、現場近くの47歳の男が逮捕される痛ましい事件が発生した。女児が連れ去られる事件は、昨年７月にも岡山県倉敷市の小学校５年の女児が誘拐･監禁されて、ようやく行方不明から５日後に保護され、自称イラストレーターの49歳の男が逮捕された事件がある。男は女児との面識はなく、調べに「下校中の女児に声を掛けて自分の車に乗せた」と供述している。最近、日本でもこのような幼児・児童を狙った誘拐・監禁・性犯罪などの事件が多く報道されるが、犯罪大国のアメリカでは子どもの行方不明が年間80万人とも100万人とも言われ深刻化している。

アメリカやカナダの空港やバスターミナルには、行方不明の子どもたちを探す顔写真付のポスターが貼ってある。また、アメリカでは自宅にくるダイレクトメールに、行方不明の子どもを探す顔写真が印刷されていたりする。トラックの荷台の横に大きく写真とともにMISSINGと書かれていたり、牛乳パックに印刷されていたりしていた。アメリカでは子どもの行方不明の大半は家出だが、理由不明も多く、何らかの事件に巻き込まれたり、親によって誘拐されたりするケースも深刻化している。親の誘拐はアメリカの離婚社会が背景にあり、子どもの親権争いから実の親が子どもを誘拐しているのである。

昔、カリフォルニアのスーパーに親子４人で買物をしていた時、子どもたちが品物の豊富さに喜びあちこちと動き回っていたところ、レジのところでひとりのお年寄りが私に近寄り、「子どもたちを見ていてあげたよ」と言われ、その時は何のことかまったくわからなかった。スーパーでの子どもの誘拐が多いことは、のちに知った。また、大きな窓から外が見えるレストランで食事をしていた時、子どもたちが早く食べ終えて退屈し、２人だけで外で遊び始めたとき、レストランに入ってきた一人の客から、「お前の子どもが外で遊んでいるよ」と注意されたことがある。「親の目の届かないところで子どもたちだけを遊ばしてはいけない」との忠告であったことは、のちに知った。なるほど、公園が、家の近くであっても自動車に乗せて子どもを連れてくる親がほとんどであった。自動車が下駄替わりなので気にも留めなかったのだが、誘拐を恐れていた面が強かったのかもしれない。

家族の絆が薄れ、地域での子どもの成長や見守りが減少するにつれ、このような幼児・児童を狙った誘拐・監禁・性犯罪は起こりやすくなっている。地域社会の崩壊と少子化によって原っぱや空き地で遊ぶ子どもたちの姿は見えなくなり、地域に居住する人々が織りなす多様な人間関係も希薄化する中で子どもたち自身の孤立化も進んでいった。地域は無防備で無機質な空間となっている。

一方、心理的背景として、成熟した大人になれない精神的に未熟な男たちの存在が浮かび上がってくる。人間の成長は身体的発達とともにこころの成長（精神的成長）がある。物質的欲求を満足させられモノが豊富にある社会では、身体は早期に大人へと発達していくが、心は発達上の課題に取り組みながら、課題をうまく乗り越えていかないと、より高

い精神的段階（成熟）へと進むことはできない。とくに幼少年期に自分が求める愛情を親や保護者から十分に与えられ、地域の安全な環境に守られることで人間や社会への基本的信頼感が形成されないと、のちにこころの成長が止まってしまったり、退行したりする。

「退行」（過去への後戻り）とはあるきっかけから精神発達上の過程を後戻りすることで、幼児期に安心して甘えられなかった思いから、思春期や大人になって親を激しく責めたり、暴力に走る場合がある。親＝権威に対しての攻撃は時として反社会的行動（犯罪）となって現われる。幼児・児童を狙った犯罪の背景には、幼児期の親子の愛情葛藤によって、傷ついた愛情飢餓の心が関係している。誘拐した子をあたかも幼いころの自分と重ね、自分が得られなかった愛情を大人となった今の自分がその子ども（誘拐した子＝幻想の自分）に注ぐことで過去の自分を癒したいとの独善的な幻想を抱いたりする。「仲良しになりたかった」「話し相手がほしかった」等の誘拐者の言葉は、単に子どもに興味を持つ性犯罪者というより、自分が退行して過去の子ども時代に戻り、得られなかった愛情を必死に求めようとする絶望的な言葉に聞こえる。だが、幻想はすぐに崩れ、現実に引き戻されたとき、犯罪を隠すための攻撃的方略に走ることとなる。

「退行」は、人間の進化的退行（先祖がえり）も引き起こしている。人はかつて狩人であった。ホモ・エルガステルは狩りをして獲物を獲得する生活を始め、のちのホモ・サピエンスへと進化していった。人の進化は採集段階、狩猟段階、農耕牧畜段階、工業化段階、情報化段階と進んできた。また人間の心は狩人であった古層の上に新しい層が積み重なって現代人としてのメンタリティが形成されているといわれている。そのせいか、犯罪の中には、狩猟段階を連想させるような事件が頻繁におきている。狩りをする犯罪者は広い空間を移動しながら周到に獲物（被害者）を物色する。獲物の行動を観察したり追跡したりして気付かれないように獲物に忍び寄る。そして、一気に獲物に襲いかかり支配することで相手の抵抗を抑圧し、目的を達成する。首尾よく獲物を獲得した際に「勝利の快感」といわれる倒錯的な興奮状態に陥るとも言われている。これは殺人行為後の「血の酩酊」と関わっている。昨年７月26日に佐世保で女子高生殺人事件が発生している。逮捕された同級生の「人を殺してみたかった」という言葉には、性犯罪者やストーカー、幼児を狙った犯罪と同様に狩人の心理と行動が現れている。高度に発達した現代人の脳には狩猟段階の心理や行動が深層に埋蔵されており、人間の攻撃性や性衝動を文化や法律制度、教育や娯楽などで厳しく統制する努力が現代でもなされている。祭りなどの祝祭や格闘技、各種スポーツや多くの殺人が登場するテレビのサスペンスドラマなどは人間のもつ攻撃性が逸脱することを防ぎ、何とか秩序化し昇華しようとする不断の努力といえよう。